

純朴女子校生は

オヤジ色に

染められて

空蝉

挿絵/もり苔

試し読み版

リアルドリーム文庫

|     |                        |     |
|-----|------------------------|-----|
| 序章  | ささやかなりしころ……………         | 4   |
| 第一章 | 奪われた唇……………             | 30  |
| 第二章 | 散花〜大好きな人の待つ店内で……………    | 73  |
| 第三章 | 染みる牡臭、馴染む肉壺……………       | 131 |
| 第四章 | ブルマSEX〜戦う彼を見つめながら…………… | 168 |
| 第五章 | そして少女は母になる……………        | 209 |
| 終章  | 蝉時雨を聞きながら〜綾の独白……………    | 276 |



## 登場人物

Characters

### 真野 綾

(まの あや)

物心つく前に母を亡くし、男手一つで育てられた少女。豊満に発育した肉体に反して、性格は慎ましく純朴で真面目。純粹すぎるという点以外は、クラスに普通にいるであろう「大人しめの女の子」。彼氏である拓とは未だ清い関係。

### 美堂 シゲオ

(みどう しげお)

綾がアルバイトをするコンビニの店長。小太りで髪が禿げ始めている中年。好人物として周りからの信頼も厚いが、好みドストライクな綾に年甲斐もなく惚れ、なんとしても手籠めにすべく動きだす。

### 浅井 拓

(あさい たく)

綾の彼氏。性格はひたむきで前向き。自然とクラスのリーダーに選ばれるタイプであり、大人しい綾を助け、励まし、支えている。

### 真野 源治

(まの げんじ)

綾の父。早くに妻を失くして以降、一人娘を育ててきた。

## 序章 ささやかなりしころ

### 1

二〇十一年四月十日。まだ残る肌寒さと眩いくらいの陽光が交錯していた、この日。前日に始業式と席決めを終えたばかりの教室は、これからの一年に対する期待と不安を内包した喧騒に包まれていた。

「綾<sup>あや</sup>。お前、今日も夕方はバイトだっけ？」

最終学年である三年生になつて最初の授業を終え、休み時間に入つて早々。退屈な授業で凝り固まった身体を伸ばすよりも先に、浅井拓<sup>あさいたく</sup>は隣席の少女に声をかけた。

「うん」

右隣で振り返つた少女の黒くつややかなおさげ髪が、濃紺のセーラー冬服を掠<sup>かす</sup>めて舞う。その背丈は百六十センチにギリギリ満たず、クラスの女子では中ほどの部類。仕草、表情、容姿、どれをとつても派手なところは見受けられない。「純朴」というフレーズがこの上なく似合う幼馴染の少女——真野綾<sup>まのあや</sup>の返答は、案の定飾り気のない、

しかし確かに親近感の伝わる優しい響きでもって紡がれた。

「拓ちゃん、今日から放課後、野球部の練習あるんだよね？」

物心ついてからずっと共に育ってきた綾は、いまだに「拓ちゃん」と呼ぶ。年頃の男子としては気恥ずかしく思うのが妥当なのだろうが、十五年来呼ばれ続けたその呼称を今さら変えることの方に、互いに抵抗を覚えていた。

「最後の夏だし、一度くらい行きたいからな、甲子園」

小学校の頃より取り組んできた野球で晴れ舞台に立てる最後のチャンスにかける意気込みを、拓が口にする。

拓の野球にかける情熱を熟知していればこそ、綾は穏やかに、ささやかな幸せを噛み締めるような微笑を彼に捧げた。

化粧一つしたことがなく、昔からずっと地味なおさげ髪。自分から前へ出る性格でもなく、綾自身が地味な存在であることを自覚してもいる。

しかし目鼻立ちそのものは整った綾の飾り気のない笑顔が堪らなく愛らしいことを、拓はもちろん、学友の多くが（男女問わず）認識していた。

（小さい頃から俺にべったりだったお前は気づいてないだろうけど、お前のが好きだって男、結構いるんだぞ）

そんなライバルたちにかっさらわれることなく綾の心を惹きとめ続けられたのも、中三の夏に告白して晴れて彼氏彼女の仲になれたのも、ひとえに野球のおかげ。

『えっと、その……私ね、その……野球に打ちこんでる時の拓ちゃんが、一番かっこいいと思ってるから……!』

そう、告白の返事をしてくれた時の綾の真っ赤になった顔は、いつもの何倍も愛らしく、思わず抱き締めてしまった。その時の甘酸っぱくも心地の良い胸の高鳴りを、拓は今でも鮮明に覚えていた。

思えば小学三年の時、初めての草野球でヒットを打った自分に綾が差し向けてくれた満面の笑み、あれが野球に打ちこむきっかけだった。そしてそれは、初めて幼馴染の少女を異性として認識した瞬間でもあったのだ。

「甲子園、現地まで見に来て応援してくれよ」

今度こそ大好きな綾を甲子園へ連れて行くとの決意表明のつもりで、黒の詰襟学生服の上から二番目まで外したボタンを弄りつつ、臆面もなく告げる。

「うん」

綾ははにかみ、確かに喜びを孕<sup>はら</sup>んだ瞳で見つめながら即答してくれる。

(俺に向けてくれる綾の笑顔が一番愛らしいんだ)

自説を打ち立てて早や九年、覆そうと思つたことは一度もない。

「何々？ 綾つてば拓くんと放課後のデートの相談中？」

「いいよね綾のとは熱々で、あたしの彼なんてさ……」

市内中から集つたクラスメイトには、去年ないし一昨年にも同じクラスだった者が少なくない。そうした馴染みの顔に、拓と綾は、これまでも度々ひやかされてきた。

そこには「何年たつても手を握るだけで赤らむ純情な二人の背中を押してやろう」という趣がこもっている場合がほとんどなのだが――。

「え……と、その」

純情すぎる綾はそういつた方面の話を振られただけでも照れ、しどろもどろになつて俯くのが常だった。

「あのな、綾にその手の話振つても無駄。お前らだつて知つてんだろ」

綾を庇うように拓が腰を上げて声を張るまでがお決まりとなつていている感もあり、二人の仲を後押しする者の中にはあえて囁すのを控える者もいる。

今しがた囁した女子二人にしても「やはりこのやり口ではだめ」と思い直してか、早々に詫びを入れ、遠巻きに見守る作業に戻つていった。

体格良く精悍せいこんな顔つきの拓が声を張つても場の空気が凍らなかつたのは、皆、それ

が一種の照れ隠しだと知っているからだ。

「……ったく」

周囲が再び和やかな喧騒に包まれゆく中で、お節介に呆れ半分、感謝半分の面映ゆい感情を持て余し、拓が自らのスポーツ刈りのこめかみ辺りを搔く。その、昔から幾度となく目にしてきた拓の癖に目を細め、綾がまた、嬉しげに微笑んだ。

（ああ、もっとパァッと笑わせてやりてえ）

綾の控えめな笑みを見るたび拓の胸を衝く、切なる想いだ。

ギャグや小喃で、というのではなく、野球で。勝って、綾に最高の笑顔を浮かべさせてやりたい。

綾がアルバイトをする理由を知ってから、その想いは尽きることがなかった。

（親父さんの工場、今日も閉まってたもんな……）

物心つく前に母親を亡くした綾を、以来男手一つで育ててきた父親、源治げんじ。

その彼が営む町工場は不景気の影響をもろに受けて下請け業務の大半を失い、この一、二年は機器を止めて臨時休業という日が珍しくない。工場は拓の登校経路にあるため、昨日今日と二日続けて閉まっているのも確認済みだ。

源治は義理人情に厚く裏表のない男とあって、拓と綾の住む町内では人望を集めて

いるが、なにぶん人口減少の続く市内にあつて特にその傾向著しい小さな町での話だ。町内はもちろん市内での仕事も数えるほどののが実状で、仕事があつても九割九分が単発の内容だった。大口の下請け業務も失つた今、元より裕福とは言えない真野家はここ二年ほど一層の貧窮に陥っている。

（それでも綾の親父さんは踏ん張つてる。根っから職人氣質かたぎの親父さんが頭下げてまで金策と営業に駆けずり回つてるのは、綾のためだ）

頑固な源治は決して口にしないが、一人娘がせめて今の学校を卒業するまではこの思いがあるということは、彼と多少なりとも付き合えば想像に難くない。

（そんな父親を一番近くで見てる綾が、何を思つてアルバイトを掛け持ちするようになったかなんて）

物心つく前から一緒にいる拓には、言われずとも察せられた。

すでに五年勤めている朝刊配達に加えて、先月から地元のコンビニでも働き始めた理由。そんなもの、少しでも父親の助けになりたいからに決まっている。学費や食費といった自身に連なる費用の、わずかでも足しになればと思つているのだ。

もう何年も人一倍苦勞しながら、綾は決して笑顔を絶やささない。

「綾」

「うん」

今も周りに心配をかけまいと、疲れや嘆きではなく、控えめな微笑を湛えている。まるで校庭の隅の日陰に慎ましく咲く雛菊の花のように、綾は日々懸命に生きている。借金をどうこうするなんて大きなことはできずとも、綾が少しでも多くの時間笑顔でいられるように、今でき得ることは何でもしたいと拓は思っていた。

「今日もコンビニに迎えに行くよ。練習終わったらちようどいい時間になるから」  
これを告げれば、喜んでもらえるはず。期待をこめ、昨日から言おうと決めていた言葉を舌に乗せる。綾がバイトを開始した先月から欠かさず迎えに行っていたが、改めて「野球部の練習があつても迎えには行ける」旨を伝えたのだ。

「……いいの?」

綾のコンビニでのバイトが終わるのは夜九時。「野球の練習でへとへとになつてるのに。私のことよりも自分の身体を大切にしてい」——綾の瞬きを止めた瞼の下の瞳を見るにつけ、今にもそう口にしそうな気がする。

「ここらでへばるようじゃ、甲子園なんて夢のまた夢だつての」

綾の気遣いが嬉しい反面、心配されるのではなく心底から頼れるような男になりた。溢れる想いが、強がり承知で言い放たせた。

それが大好きな男の子のいつもの姿だったからこそ、綾は申し訳なさを覚えるのと同時に、ふっと肩の力を抜いて再度微笑みを漏らす。

「……だね。うん、お互いにかんばろっ。……いつも、ありがとね」

どこか儂<sup>はかな</sup>さを感じさせる響きの、けれど確かに未来を見据えて希望を抱いた少女の言葉が返ってくる。眩いその笑顔に、拓はまた密かに見惚<sup>みほ</sup>れざるを得なかった。

## 2

町で唯一のコンビニエンスストアは、夕方から特に賑わいを見せる。といっても田舎町なので、店内やレジが混み合うということとはほぼない。

二つあるレジの内一方に店員が居れば事足りるのがほとんどで、その間もう一人の店員は商品陳列や店内外の掃除、バックヤードの整理などに取り掛かれる。

「こちら、八百二十三円になります」

学校から帰宅後に夕食を作り、父と食卓を囲んでから大急ぎで出勤した綾も、水色と白のストライプ柄の制服に着替え、精力的に働いていた。

「ありがとうございます」

午後八時十二分。

レジ越しに見送った男性客を最後に、客足が途絶え。

「私、駐車場の掃除行つてきます」

店員二人きりとなった店内で、綾は休む間も惜しむように、交代でレジに立ったばかりのもう一人——恰幅のいい中年男性に申告した。

「うん、よろしくね」

小太りの腹と薄くなつた頭頂部が目立つ彼の名は、美堂みどうシゲオ。今年四十四歳になる、この店のオーナー兼店長だ。本来は土曜日のみ綾と同じシフトに入っている彼だが、今日は一人病欠者が出たために急遽その穴埋めに入っていた。

「綾ちゃんの掃除は丁寧で助かつてるよ。隅々まで行き届いてて、見てるこつちまで清々しい気持ちになる」

顔をくしゃつと歪めて喜びを目一杯体现するそのさまは、冴えない風貌を「柔和で優しそう」という印象に好転させる。

事実、彼は人当たりが良いことも手伝い、町内の誰からも「愛嬌ある男」という印象を持たれていた。地元の他、県庁所在地などにも多数の不動産を有する大資産家の家に生まれついたにもかかわらず、偉ぶるところの全くない彼のことを悪くいう者は、

綾の知る限りいない。

綾自身も例外でなく、一から根気よく仕事の仕方を教えてくれたことに対して感謝の念を抱くとともに、信頼と親しみをもって接していた。

そんな彼に評価された、それ自体はすこぶる嬉しかったが、

「いえ、そんな。褒められるようなことじゃないですよ」

当たり前と思つてやつていることを過剰に褒めそやされた気がして謙遜してしまう。

「いやいや。誰も見てないだろうって、吸い殻拾いなんかは雑に済ます子もいるんだよ。その点、綾ちゃんは真面目で手拔かりがないから。本当に良い子が来てくれたと感謝してるんだ」

語るシゲオの眼はまるで幼い娘を見守る父親のごとく、ひたすらに優しい。それに見つめられるたびに、綾の胸には照れと恐縮が交錯した。

「で、店長さんにはシフトの件とかでもお世話になりっぱなしですし。ご恩をまだまだ返し足りないくらいです」

月曜から金曜は夜七時から九時までの二時間、土曜は午後三時から九時までの六時間という変則シフトを組んでもらっている上に、学校行事等で遅れる時には代わりにシフトに入ってもらってもいる。感謝してもしきれないのはこちらの方だ、という気

持ちで綾が申しわけなさげに見つめ返せば、シゲオは一層ニコニコと顔を緩ませた。

「なんだそんなこと。気にしないでよ。お父さん……源さんのためにも頑張りたいて綾ちゃんの姿勢を、僕としても応援したいんだ」

学生ながら夜九時までのアルバイトを申し入れた段階で、シゲオには家庭の事情を伝えていた。承知した上でシゲオは、シフトに空きのなかった日曜を除いて、綾に可能な限りの時間帯を用意してくれたのだ。

「ありがとうございます」

何度頭を下げて、やっぱり感謝し足りない。心からの気持ちをかめて深く一礼すると、シゲオは今度は困ったように顔をくしゃくしゃにして、それからまた、愛娘を見守る父親のような柔和な瞳で見つめてくる。それは昔気質の父を持つ綾にとってはこそばゆい感じがするものだったが、心に温みを与えてくれるものには違いなかった。

「それじゃ、お掃除行ってきます」

与えられた温みを抱き締めるように、綾は胸の前で掃除道具を抱えて、元気に聞こえるよう努めて声を張った。

「気をつけて、つてすぐそこまでか。それに、ここから窓越しに見える範囲だわな。はは、行ってらっしゃい」

自動ドアに向かうおさげ髪の背を見つめる四十路よそじ店長の細められた瞳は、誰の目にも優しく映るもので。

「あ……」

自動ドアを潜って外に出てすぐに天を見上げた少女の眼には、漆黒の夜空が映りこむ。

（拓ちゃんも、きつと今頃汗だくになって頑張ってる。私も、もつと頑張らなきゃ）  
夜間練習に励んでいる幼馴染兼彼氏の奮闘ぶりを想像して頬緩ませる少女の瞳には、明日の雨天を予感させる星一つない闇空とは正反対の、前向きな感情が煌いていた。

### 3

午後八時二十五分。

野球部の練習用ユニフォームに身を包んだ拓の姿は、明かりのついた学校の体育館内にあった。

過疎で財政難の町の野球部には、専用のグラウンドはおろか、校庭で陽が落ちてからも練習するための照明設備すらない。

陽が落ちて以降は体育館で体力作りと称した基礎練習に励むのが常だった。

「よし次っ」

今年から転任してきた、やり手と評判の顧問兼監督——四十歳の髭面教師のホイッスルの音に従って、無駄に広い体育館の壁に沿い円周を走塁姿勢で駆け抜ける練習。今日の練習の最後を飾るこれも、すでに十巡目に突入していた。

「次っ。浅井と加藤かとうと木村きむら！」

「はいっ」

呼ばれたのは最終組。主将で投手の拓を含めて皆三年で、レギュラーの中でも主力と目されている。

「先輩っ、ラストイチですっ」

「氣い抜くなよー！」

氣力を振り絞れるようにと「最後の一回」であることを強調する一年生部員の声に続いて、すでに走り終えた同級生からの叱咤激励。共に汗流す頼もしい仲間、総勢六名からの声援を背に浴びながら。

「よし、行けっ」

監督の号令とホイッスルの音を受け、三者一様に低い姿勢からのスタートダッシュ

を決める。

「……ッ！」

飛び出して風を切る拓の視界に、他の二人は映らない。つまり、前に行かれてもいなければ、横に並ばれてもいない。トップを独走していた。

(くっ、そ、息苦しいし、汗でベチョベチョだし、きつい……けど……っ)

負けるな。頑張れ。仲間からの様々な声が、駆けるほどに遠ざかる。追いつがる他二人の息遣いが、すぐ後ろに聞こえた。

(負けてたまるか！)

声援に力をもらい、負けん気の強さを支えに、疲労の溜まった脚を前に忙しなく送り出す。前傾姿勢で、身体の重心は円周の内側を意識し、ベースを蹴るつもりで駆け抜けた果てに、ストップウォッチを構えた記録係の一年生部員が待っている。

「……っくうっ！」

気力体力、全部を振り絞って走りきり、記録係の横を抜ける。

「くっそ！」「負け、たあああっ」

追いつがっていた加藤が悔しげに膝をついて床を叩き、そのすぐ後ろで木村は早くも床に大の字に寝て、共に荒い息を吐いていた。

「……っへ。……はあああ……」

勝利した拓もまた、床に寝転び、火照る肌に心地の良い冷たさを感じ取る。

グラウンドでの練習も含めて四時間超の練習をこなした育ちざかりの肉体が、栄養を欲して腹の虫を鳴らしていた。

「よし！ 三人とも良いタイムだ！ 今日はいままでとする。更衣室と体育館の鍵は主将の浅井がかけて、職員室に持ってこい。以上、解散！」

太く廠つい監督の声でもって本日の練習は締めくくられ。

「あゝ、腹減ったあああ」

「へへ、実は俺、昼の内に学食で菓子パン買つといたんだよ」

「マジかよ木村。恵んでくれ。一口、一口だけでいいから。なっ？」

部員たちは皆、解放感に包まれて賑やかに更衣室へと向かう。鍵係でもある拓は仲間先の先頭に立って歩きながら、一つの実感を噛み締めていた。

（俺に、加藤に、木村。今年是一年も足が速いのが揃ってる）

監督の走塁重視路線も、足がチーム最大の武器になると判断してのことに違いない。去年は県予選で八強どまりだったが、これなら。仲間の顔を見てみると、ふつつつ

と期待が湧きたつ。

（たった十人の小さな野球部なのには変わりねえ。けど今年こそは……綾を甲子園へ連れて行ってやれるかもしんねえ）

今は淡い期待でも、努力を続ければ、より現実味を帯びたものに変わっていく。そう、信じて。

開錠した更衣室に入るなり、額の汗を拭うと、壁に掛かる時計に目をやった。

指し示されている時刻は八時二十九分。綾の働くコンビニまでの距離を考えると、汗を拭いて着替えてから向かえば、九時を少し回る頃に着けるはず。ちょうど、綾がコンビニの制服からセーラー服に着替え直して退店する頃合だ。

（綾のことだから、今日もひたすら頑張ってたんだろうな。……頑張りすぎて、へばってなきやいいけど）

疲労に喘ぐ我が身を柵に上げて、恋人を案じる。

（いつだって頑張りすぎる奴だから、心配なんだ）

一秒でも早く迎えに行つてやりたい——切なる想いが、拓を急かした。

午後八時五十二分。

「することがなくなつちやつたねえ」

「……ですわね」

半時間ほど来店客のない時が続き、合間にできる雑務もすべて片付けてしまった綾とシゲオは顔を見合わせ、揃つて苦笑いを浮かべた。

外灯まばらな田舎の夜道に好んで出る者は少ない。競合を避けるため商店街からは離れたところにコンビニが立地している事情もあり、今のような事態に陥ることはこれまで、週に一度くらいの頻度であつた。

「明日は雨かな。空に星が出てないと余計暗く見えるわね」

明日の来店客が減るのを懸念し、浮かない顔でシゲオが言う。

つられて夜空に目をやつた綾も、もうすぐ訪れる帰路と、暗い中迎えに来てくれるはずの幼馴染の身を案じた。

（拓ちゃん、大丈夫かな……）

迎えに来てくれる途中で夜道に足を取られたりしていないか。運動神経のよい彼のことだから怪我の心配はないと思う一方で、疲れている彼に迎えに来てもらうことへの申し訳なさが再度胸に広がり、綾の顔が憂いを帯びる。

「もうお客さん来そうにないねえ。よし、ちよつと早いけど、綾ちゃん、今日はもう上がっていいよ」

「え。でも……」

時計の針が五十三分を回ったばかりなのを確かめて、綾がシゲオの顔を見つめた。

「タイムカードは僕が押しとくから。今日は外、格別暗いし。それにもうすぐ拓くんが迎えに来るんだろ？ 彼が来たらすぐ帰れるよう準備しとくといい」

配慮の行き届いたシゲオの提案が、沈みかけていた心根に染む。厚意に甘えたい気持ちしが急膨張し、喉元にまで出かかった。

「ありがとうございます。でも、大丈夫ですよ、私。お仕事、ちゃんと時間まで頑張れます。着替えるのも早い方ですから」

それでも笑顔で固辞する。任された時間を全うすることがシゲオの厚意に報いる一番のことだと思つたし、もしもわずかな時間とはいえ早引けをさせてもらつておいて満額の給料を受け取つた場合、練習を頑張つてから迎えに来てくれる拓、幼馴染の努力を信じて疑わない彼に申し訳が立たないと思つたからだ。

生真面目で融通が利かかないと思われようとも、そこはどうしても譲れない。

「そうか。うん、わかつた。じゃ、あともうちよつと、よろしくね」

領き告げるシゲオの顔は穏やかで、その瞳はまた、親が子を見るような優しい気配を帯びている。厚意を拒まれても不機嫌な気配一つ見せないシゲオはやはり人間が出来ている。尊敬を新たにしたのと同時に、彼の瞳の優しさの理由がまた気になった。

そんな綾の心模様が伝わったかのようなタイミングで、シゲオが再度口を開き。

「……うちの子も、綾ちゃんのように育ってくれてるといいんだが」

一層気にかからざるを得なくなる言葉を発した。

「え……?」

町内でも彼は独身として広く認知されていたし、綾も家族と連れ立っているのを目にしたことがない。ゆえに、覗<sup>うかが</sup>うような眼差しで彼を見つめてしまった。

「恥ずかしい話だけど、随分若い頃に離婚していてね。娘も一人いたんだが、元かみさんの方に引き取られて以来、一度も会っていないんだ」

ゆっくりと吐き出すような、自戒と寂しさのこもったシゲオの口振りに、思わず引きこまれる。そして、合点がいった。言われてみれば確かに、町内の、特にシゲオと同世代ないし年上の面々は、シゲオに家族の話聞くのを避けている節があった。

「娘は、綾ちゃんより一つ年上なんだ。それでかな。綾ちゃんを見てると『娘もこんな風に素直な子に育ってるのかな』なんて、考えちゃってね……」

シゲオが時折向ける優しい瞳の意味を知った綾の胸に、彼に対する憐憫れんびんの情が湧いた。離婚の事情がわからない以上単純に同情するべきではないのかもしれない。それでも、世話になった店長の寂しい心情を思いやりたかった。

(でも、なんて声を掛けたらいいんだろう)

言葉を知らない自分はまだまだ未熟者だ。

不甲斐なさを噛み締めた綾が唇を噛み、眉根をたわめた矢先に、来客を告げる自動ドアのチャイムが鳴った。

「いらっしやいませ、こんばんは」

先ほどまでの沈んだ様子を瞬時に打ち消したシゲオの挨拶。その明るい響きが、自動ドアを潜って入ってきた老婆の客に捧げられる。気持ちを見事に切り替え仕事に戻るシゲオの様がまた、綾に年の差と、経験の差を痛感させた。

「卵を切らしちゃってねえ。欲しいんだけど、どこに置いてあるかね？」

老婆に視線を向けられて、綾はまだ自分が挨拶もしていなかったのに気づく。

「あ……い、いらっしやいませつ、卵ですね。ご案内します」

慌てて挨拶と一礼をしてから、生鮮食品売り場へ案内しようと小走りに足を進める。そのような矢継ぎ早の行動が、不注意に繋がった。

「きやつ……」

シゲオの後ろを通つてレジカウンターを出ようとした綾のつま先が、彼の運動靴の踵に擦れてつんのめり。少女の肢体は危うく前倒しに転ぶところを、とつさに伸びたシゲオの手に支えられることで、ようやく踏みとどまることができた。

「おおつ、とと……大丈夫かい、綾ちゃん」

難を逃れた少女を労<sup>いた</sup>わるように、シゲオが言う。彼の左手は、綾の胸に巻きつくようにして少女の細肩を掴み、支えとなつてくれている。結果、外見から予想し得る以上のたっぷりとした胸の量感がシゲオの腕に押し掛かり。

転んだことの比ではない羞恥に炙られた少女の心臓が激しく高鳴った。

「は、はい……あの、すみません……」

耳まで真っ赤になつて恥じ入り、全身強張つた状態で、やっと声を絞り出す。発した謝罪は、転んで手を煩わせたことはもちろんのこと、「胸に触れたことでシゲオが居心地の悪さを覚えてしまうのでは」という懸念にも基づいていたのだが――。

「……ん、はは。気をつけてね」

彼は、さすがに少々気恥ずかしそうではあつたものの、すぐにいつもの柔らかな面持ちを取り戻してくれた。さらには、いまだ抱き締める格好のままだった少女の肢体を

そつと離し、軽く押すようにして送り出してもくれる。

(ううう、また失敗しちゃった。それもあんな恥ずかしい……)

羞恥の火照りが一向に抜けない顔を手で押さえたまま、シゲオに改めて一礼して客のもとへ足を向ける。

転倒の勢いのまま押しつけることになった制服越しの両乳房には、いまだにシゲオの腕の感触が残っていた。

小ぶりの乳輪を含む乳房の頭頂部分を潰すように押しついた腕の堅さ。一向に身から消え去ろうとしないその感触が、心拍と動悸を荒ぶらせてやまない。

「お待たせしてすみません。卵はこちらになります」

老婆を案内する間も、どこか不穏な心内の在り様が好転することはなかった。

5

買い物を済ませた老婆が去ってほどなく。退勤時刻を迎えてセーラー服に着替え直した綾が店外に出ると、ちょうど迎えに来た学生服姿を十メートルほど先に見つけることができた。

「お。ちょうどいいタイミングだったか」

数分前に幼馴染の胸に触れた手があるとは思ってもいない拓が、にかつと笑って駆けてくる。毎夜目にする彼の姿に少しだけ心紛れた綾が努めて笑顔で応じたために、その胸内に未だ残るざわつきも知られることはなく。

「ほれ」

当たり前前に差し出された彼の手に、少女が自身の細指を預ければ、互いの胸内に一気に安堵が広がる。

振り返れば、外灯の少ない田舎の夜にあつて煌々とした明かりに包まれている町唯一のコンビニエンスストアが、際立って眩い。

寂れた町の希望のともし火のようであり、夜の寂しさを誇張しているようでもあるそれが、少年少女の手の繋がりをより強固なものとする。

すでに挨拶を済ませてあるシゲオに、綾は改めて窓越しに会釈し。遅れて会釈した拓共々、シゲオのにこやかな笑みに見送られながら帰路を歩みだす。

「今日、どんな練習したの？」

「ん？ ああ、グラウンドでいつも通りやってから、体育館でダッシュを十セット。きつかったけど、でも……手応えはあったかな」

珍しく綾の方から話を振ってきたことに拓は一瞬目を丸くしたものの、すぐに嬉しげに語り始める。綾に歩幅と速度を合わせて進みながらも、その足取りは弾んでいる。物心ついた頃より共にいる綾にしかわからない微々たる違いではあったが、確かに彼はいつも以上に溢れる希望を、胸内に押しとどめておけない様子だった。

「監督の指示も的を得てたと思うし。結構な鬼教官だけど、俺らにはそういうのが合ってる気もするんだよな。少なくとも俺はついてこうって思ったよ」

それは、歩むにつれて熱帯びる口調という形で、ほどなく鮮明になる。

「サボり癖のある木村でさえ『去年より上、狙えんじゃね』つってたんだぜ」

語る拓の手を握る指にほんのわずか力をこめると、拓の方からもぎゅっと握り返してくれた。長年汗と泥にまみれた結果すっかり厚く、ごつく、大きくなった男の子の手。その温みに包まれているうちに、綾の胸内のもやは綺麗さっぱり晴れていた。

代わりに敷き詰められつつあったのは、

（今、拓ちゃんの腕に抱きついていたら、どう……なっちゃうのかな）

そんな年頃相応の、けれどウブな綾にしてみれば不埒に過ぎる衝動だ。

——キスもまだなのに、はしたなさすぎる。

——それに、せつかく楽しそうな拓ちゃんの話を遮るのは申し訳ない。

案の定、少女の強すぎる自制心が働いたことで、結局衝動は内に押しこめられるうちに立ち消えてしまったのだけれど。

「俺の腕、なんかついてるか？」

「う、ううん、なんとなく見てただけっ」

視線に気づいた拓の問いかけに、慌てて首振る少女の胸には、また、微かだが違和感が芽生えていた。

（なん、だろ。なんか……胸、敏感になっちゃって……る……?）

ときめく胸の先が衣服の裏地と擦れ生じた、小さくも確かな衝動。むず痒さと菌痒さを混ぜこぜにしたようなその正体を、自慰オナニも未体験の綾は知らない。

知り得ぬ以上、対応もできない。今は、隣を歩む拓の気配を気にしながら密かに戸惑い、理由のわからぬ罪悪感を噛み締めるほかなかった。

「夏が終わるまでは無理だけどき、秋口に一回、どっか遊びに行かないか」  
「えっ」

不意の幼馴染の話題転換に、彼の顔を、伏し目がちとなっていた綾の瞳が仰ぐ。そうして彼が赤らみながら告げてくれたという事実を知り、つい今しがたの罪悪感伴うものとはまるで別種のきらきらとした期待にときめかされる。「二人で」とは言われ

なかったが、そうに違いないと、拓のそわついた様子から察せられた。

「日曜はコンビニのバイト休みだろ。甲子園出場祝いってことで。……駄目か？」  
行けなかった場合に言及しないのが、拓らしい。恥ずかしそうなのに決して目を逸らさないのも、綾のよく知る幼馴染の特徴だった。

『絶対に甲子園へ連れてってやる。約束する』

幼き日に交わした約束の先に待つ、新たな約束。ずっとそばで見えてきた大好きな男の子との、夢と希望に満ちたそれを断る理由があるはずもない。

「うん。楽しみに待ってるね」

久方ぶりの満面の笑みを湛え応じる少女の胸に、もう違和感が残っていないなかった。

視線と刺激を同時に浴びた女性器が、心が恥じ入るほどに喜々として引き攀れ始め——そのすぐ近くの別の穴で抑え難い衝動が湧き上がる。

（う、嘘、な、なんで今っ！）

そういうえば今日は出勤前にトイレを済ませていない。日々の習慣をすっかり忘れていたことを今さらながらに思い出し、戦慄する。

「おとっ、っひやああっ」

膀胱の切迫感に耐えきれなくなつて、瞼を開き、シゲオの顔を見つめて「おトイレに行かせて」と乞い願うつもりが、ちょうどまた鼻筋に擦られた割れ目からの甘い痺れに狂わされ、代わりの喘ぎが迸る。

堪らず背を仰け反らせた拍子に後方に倒れそうになつても、尻を抱くシゲオの手に力強く引き戻されてしまう。

「いいよ、安心して感じまくっていいんだよ綾ちゃん」

シゲオの声音が、優しい店長のそれに戻つて、ショーツの向こうの恥毛を吹かすように囁きかけてくる。

反面、尻を揉む左手と、割れ目を擦る鼻筋には一層の熱がこもつてゆく。

（違います……！！ トイレに行かせてほしいの……っ！）

勘違いを正す間もなく、シゲオの右手が背に巻きついてきて、さわさわと撫であやされる。シゲオにしてみれば感じてくれている礼のつもりだった小さな刺激が、尿意を我慢する綾にとっては毒に他ならなかった。

「やあつ、あああ、出ちゃううううつ」

排尿を促すように背をさすられたのと同時に、膣口に押し掛かっていたシゲオの鼻筋が上へと這いずり移動してゆく。

「ひっ、いいあああつ」

摩擦が膣にもたらす痺れ。その甘露に耐えようとするほど、尿意が迫り出してくる。慌てて尿意を押し殺しにかかれば、甘露が増長し——繰り返すうちに、二つの感覚の境界は曖昧になっていった。

「ああ、クリもこんなに膨らませて……ん、ぢゅッ！」

いよいよ割れ目の上端へと到着したシゲオの唇が、包皮を被ったまま密かに膨らみ続けていた陰核に吸いつき、吸り上げ。

「……ッッ！　　ッッッッッッッッッッ！」

声なき声を上げて、綾の涙に潤んだ瞳が二度瞬く。堪らず跳ねた綾の腰が、シゲオの顔に自ずと押しついた。そうして圧迫された下腹部で、ついに決壊した尿意が膀胱

を飛び出して尿道に雪崩れこむ。

（制服……！ 汚したら、拓ちゃんに絶対『どうした』って聞かれる——）

脳裏によぎった幼馴染の心配顔に悲痛を煽られながら、尿道器官に装填された尿が噴き出るまでの短時間に否応のない覚悟を迫られる。一、二、三——十秒も経たぬ間に、懸命にスカートを握る両手に力を込め、唇を噛んだ。

「あ！ ああ！ あ——ッッ！」

直後、ブルリと震えた膀胱が黄金色の迸りをショーツの裏地に噴きつけ。それはすぐに薄布の吸収力を超えて、ボタボタと畳を叩く。

同時に襲った絶頂の波が、すでに笑い通しだった綾の膝を折ろうとするたび。

「あ、綾ちゃんっ!!」

驚きながらも遅い男の手が尻を握り、支えてくれた。おかげで尿だまりの上へたり込まずに済んだ少女の背を、シゲオのもう片方の手が「よしよし」とまたあやしてくる。

「つぶ、うう、うええ……つ、ごめ、なさっ……わたし、わた……ひいッ……！」

幼児のように泣き、しゃくり上げるたび。弾ける絶頂の悦波に腰が引け、上体がくの字に折れ曲がった。なのにその状態から腰が独りでに前後左右にくねって、出続け



る尿を振り撒いてしまう。

綾自身の内腿にも伝い、終いにはハイソックスへと染んだ尿のさらついた温みが、保育園以来の失禁をしたという現実を嫌というほど突きつけた。まず溢れた強烈な羞恥と相反するように、溜まっていた尿を出し尽くす解放感もまた胸を衝く。

「うあ、あ……っ！ つひ！ あ！ あアア……ッッ！」

さらにぶり返し続ける悦の波も加わって、羞恥は快感へと迎合する。

（お漏らし、恥ずかしくて死にそうなのに……私の身体、どう……なっちゃってるの……怖いよ、拓ちゃん。……助けて、お父さん……！）

情けなくて、恐ろしくて、今すぐ誰かに縋りついて腹の中のものを全部吐き出しながら甘えたくて堪らない。

忙しく働く父・源治に男手一つで育てられ、清貧な暮らしも相まって親に頼る、甘えるということを我慢してきた娘の心根に、まだ分別のついてなかった幼少期以来の、父親に甘えたい衝動がぶり返す。

「よしよし、偉かったね綾ちゃん。……いっぱい我慢してたのに、気づいてあげられなくて、ごめん」

そんな折に与えられた「あやし」は、たとえそれが失禁の一端を担った男からのも

のだとしても、よく染みた。

「ふう、う……っ、やあ……んっ、ンン……あ……ッ」

背を撫でられるたびに、まだ健在の悦の波がぶり返すものの、悦波自体弱まっていることもあって、渴望していた心を潤す「あやし」の心地良さが勝つてしまう。

娘思いではあるが不器用で厳格な源治が、今のように肌に触れ撫でてくれたことは、小さい頃から一度もない。

物心つく前に母を亡くした綾が甘えたい盛りだった頃に得られなかったものが、今でも渴望として胸に秘められていた。綾自身知らずにいたそれが今、よりにもよって陵辱者たるシゲオの手で白日の下に晒される。

(……私、こんなに弱かったんだ)

皮肉な状況を嘆くのと同時に、己の心の頼りなさを自覚させられる。そうして自分の心と向き合う中で、もう一つの事実にも気づかされた。

(最初は、店長さんが私に娘さんの影を重ねてる、って思いこまされてた。でも実際は……私の方が、店長さんに『甘えられる父親像』を見てた)

信頼と尊敬だけでなく、甘え縋りたい思いが無意識にあつたればこそ、恥ずかしがりの自分がああも楽に距離を縮められたのだと、遅ればせながら思い知る。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させちゃう  
かなり過激な  
陵辱系ライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!

小説家になるこの男性向けサイト  
「ノックタリッシュノベルズ」  
から書籍化!

ビギニングノベルズ  
キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!?  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界  
ドキドキキアラノベル

ドキドキキアラノベルな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫